

## 季節色のないゴビ

フフバートル（昭和女子大学）

モンゴルといえば、大草原を想像する人が日本でも中国でも多い。それはモンゴルの大地に期待するロマンや憧れを「草原」という地理用語に抱かせたからであろう。実際、中国では1940年代後半から、それまで「塞外」という「野蛮」なイメージが強かったモンゴルに「少数民族地域」としての「新生」をもたらす意味で共産党系のモンゴル族作家たちが中心に「草原」を賛美しはじめた。それがその後、モンゴル語にも新しい概念として「逆輸入」されたほどである。今や、「草原」は市場経済のなかの観光市場として、モンゴルの地形というよりも中国の「名勝」になりつつある。

実際、モンゴル高原は地形が多様である。モンゴル国のばあいには、東が草原地帯で、北がハンガイ、つまり、山や林、河川の多い地帯で、西が山岳地帯で、南がゴビ地帯である。ゴビはそのまま国境を越えて内モンゴルの領内に延びてくるが、内モンゴルも地形がさまざまであるため、モンゴル人なら誰もがゴビの地理的特徴を知っているとは限らない。「ゴビ」という名称には「砂漠」がつきがちなので、「ゴビ」を砂漠だと勘違いする人も多い。わたし自身も昔はウランバートルへの列車は砂漠の中を走っているとばかり思っていた。実際に乗ってみて、そうではないことがわかったが、それでもゴビは黄色、つまり、砂漠の色、あるいは、荒涼な平野の色であるという思いは変わらなかった。それはモンゴル語でゴビが黄色のものに比喻されることが多いからかもしれない。例えば、「金のゴビ」、「太陽のゴビ」などである。ちなみに、中国語で太陽は「赤」なので、「文革」のころはモンゴル人も毛沢東を「赤い太陽」と言わなければならなかった。

しかし、ゴビは黄色なのか。地球研の「オアシスプロジェクト」の研究調査で初めてエズネーに行った時、バヤンホトまで迎えに来てくれたモンゴル人運転手が、「途中までは普通の景色かも知れないが、それから先はずっと鉄の黒いゴビを走るんだ」と言ったのを聞いてまったく驚いた。エズネーに行ったことのないモンゴル人に彼はいつもそう言っていたのか。そんな言い

方を聞いたモンゴル人たちも「鉄の黒いゴビ」とは聞いたところどころなのかと興味津々になっていたに違いない。

その後エズネーには何度も入り、行くたびに運転手に地形の話聞いた。バヤンホトからウルジーまではブーレグ (böörög, 草の茂みのある砂盛り) 地帯が連なり、その東部にはシル (Shil, 草のある高い地帯) があり、またホウドウー (khödöö, いわゆる「草原」) もある。それからゴビ地帯との間にはホーロイ (khooloi, 細い通りのような地帯) がある。そこを渡り、左に曲がったところから西へ延々と延びるのが「黒いゴビ」で、北側にはモンゴル国との国境沿いにホウンドウス (khöndös, 山の麓のゴビ地帯) が眺められる。この辺のモンゴル語の地理概念はこれだけではなかった。「ゴビ」は中国語ですら意識が難しく、音訳の「戈壁」(gebi) である。ここでもゴビは昔、夏は「緑」があり、冬は「白」があったという。わたしはこの二年間ほぼ季節ごとに行っているが、見たのは季節色のないゴビであり、それは地球というよりも「火星」という感じであった。